

丘の上のムラ

弥生時代、稲作の定着により人々は大規模なムラを形成します。

ムラには、生産地である水田に近い場所につくる「平地の集落」と丘陵の斜面や山頂に営まれた集落「高地性集落」があります。

縄文時代のケモノからムラ人を守るムラから、弥生時代には他のムラ人からムラを守るために集落の周りに堀をめぐらした「環濠集落」かんこうしゅうらくが生まれます。この環濠をもつ集落・ムラは、稲作文化とともに中国・朝鮮半島から伝わったムラの形態です。

平地のムラでは、数基の竪穴式住居からなる小規模なムラと、数十基の竪穴式住居と食糧としての米やムラの財産を保管する倉庫、時にはムラの代表者が儀式をおこなう大型建物をもつ大規模なムラがあります。

大規模なムラは、各河川流域単位で存在することが多く、その地域の「拠点となる集落」きょてんと考えられています。この拠点集落では、地域の代表者が生まれ、他地域からの交易品も運ばれてきました。

京都府内では、長岡京市神足遺跡、南丹市池上遺跡、京丹後市途



丘陵斜面に掘られた溝（扇谷遺跡：京丹後市教育委員会提供）

中ケ丘遺跡などのムラが拠点集落と考えられます。

平地につくられたムラに対して、丘陵または山頂につくられたムラがあります。このような高い場所にあるムラは、生活していくのに不便なところですが、たとえば、飲料水の確保や水田耕作のた

めに山の上と平地を行き来しなければなりません。このような高い場所にムラをつくったのはなぜでしょうか。最も有力な説は、なんらかの争いごとが起こったために、このような高い場所に集落を営んだと言う説です。

ムラの形態は、平地に営まれたムラとともに、ムラ・地域をまとめる過程で戦乱が生まれ、その戦乱時のムラとして山頂・丘陵に営まれた高地性集落が生まれます。『魏志倭人伝』に書かれた「倭国大乱」の頃に高地性集落が増加したとも言われています。

丘陵・山頂にあるムラの例としては、京丹後市扇谷遺跡や南丹市今林遺跡、木津川市木津城山遺跡、同椿井遺跡などがあります。

木津川市木津城山遺跡は、現在の木津川の水面から70～80mも高いところで、10基前後の竪穴式住居跡が見つっています。椿井遺跡では竪穴式住居跡とともに焼け土を含む掘り穴があり、緊急時には「のろし」を上げて通信を行っていたとも言われています。

(筒井崇史)



山頂につくられた高地性集落（今林遺跡）



丘陵につくられたムラ（木津城山遺跡）